



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	制作型授業における相互評価の効果に関する実証研究：フィードバック・リテラシー理論に基づいて [全文の要約]
Author(s)	沙, 華哲
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(理学)
Dissertation Number	甲第16257号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95415
Type	doctoral thesis
File Information	Huazhe_Sha_summary.pdf



学 位 論 文 の 要 約

博士の専攻分野の名称 博士（理 学） 氏 名 沙 華 哲

学 位 論 文 題 名

制作型授業における相互評価の効果に関する実証研究
ー フィードバック・リテラシー理論に基づいて ー

本研究は、制作型授業における学生の相互評価活動とその学習効果に着目し、相互評価を中心としたフィードバックリテラシーの調査および学習成果の改善に関する実践的なアプローチを探索したものである。具体的には、オンライン授業を含む対面授業が主とした教育現場において、学生が相互評価活動にどのように参加し、どのような学びを得るかを多角的に分析した。

第2章では、日本の高等教育における相互評価に関する研究の動向と課題を、スコーピングレビューを通じて分析を行なった。特にコメント付き相互評価において、レポートの質向上や学生の主体的な学習が促進し、教員の負担が軽減できるといった効果が示された。一方で、学生は相互評価プロセスに負担を感じ、教員も相互評価プロセスを効果的にデザインする必要がある、さらに学生によるフィードバック情報の質を高める必要があることが課題として浮かび上がった。

第3章では、オンライン授業における相互評価活動に焦点を当て、学生の参加度と学習成果との関係を検証した。その結果、相互評価への積極的な参加が学生制作するOER（オープン教育リソース）の質向上に寄与することが示された。一方で、一部の学生は相互評価活動への参加が不十分であり、その結果、成果物の出来栄が十分ではなかった。これには、学生のフィードバック・リテラシーにレベルの差がある可能性があり、質の高いフィードバックを行う能力や、フィードバックを効果的に活用するための教育デザインが必要であることが示唆された。

第4章では、学生のフィードバックリテラシーに関する現状を、アンケート調査を通じて明らかにした。調査結果から、フィードバック情報を活用する能力、提供する能力、感情を管理する能力に個人差があることが確認された。一部の学生は批判的コメントの受容や活用に困難を感じており、フィードバック情報の効果的に活用・提供するための具体的な教育支援の必要性が示唆された。

第5章では、制作型授業における学生の相互評価、教員評価、学生の自己評価の3つの評価方法を比較し、それぞれが制作物の改善に与える影響を分析した。その結果、相互評価を通じて得られるフィードバック情報が、制作物の改善に直接活用する際に、効果が不十分な場合があると確認された。しかし、教員評価や自己評価と組み合わせることで、相互評価の効果がさらに高まることが示された。一方で、学生が考えたフィードバック情報の質向上が課題として残された。

第6章では、制作型授業において自己説明ワークシートを導入した相互評価の実施により、相互評価活動の質向上を試みた。分析の結果、自己説明ワークシートの活用により、コメントの質が向上し、被評価者がコメントを制作物に反映する能力が高まることが確認された。また、相互評価活動を通じて、学生が他者への貢献意識を高め、相互評価活動に対して前向きな姿勢を持つようになったことも確認された。

本研究では、相互評価の有効性が確認されたものの、いくつかの課題が明らかになった。特に、フィードバックコメントの質のばらつきが課題として挙げられ、建設的かつ具体的なフィードバックの提供を学ぶ機会や評価基準の統一が求められる。また、短期的な相互評価活動に留まらず、長期的にフィードバックリテラシーを育成する教育デザインの検討や複数学期にわたるスキル向上の仕組みが必要である。さらに、教員の介入の最適化やフィードバックの質向上、多様な学生

に対応する柔軟な活動設計を通じて、すべての学生が参加しやすい環境を構築することが課題として残されている。